

大学における SEL 授業の報告 ——子どもの学び支援実習の取り組み——

松本有貴, 岡山千賀子 (徳島文理大学)

Report on SEL teaching practices in university: Initiative of Supporting Children's Learning
Practice

Abstract: This paper reports on the teaching practice of Social and Emotional Learning (SEL) in higher education in Japan. SEL is an education that focuses on the non-cognitive social and emotional skills. Social and emotional competence (SEC) are associated with academic performance, psychological wellbeing and positive social interactions. However, SEL in Japan is mainly practiced in primary and secondary education, and SEL practice and research in higher education is a current challenge.

To improve the SEC of university students, 30 SEL-based lessons were delivered in a training course for teachers and childcare workers, with the specific expectation that the students would be able to teach SEL in childcare and educational settings and take an active role in their own wellbeing. Students with SEC can be expected to create positive environments in schools and childcare centers and to have positive career outcomes.

Prospective students in Years 1-4 (34 students) participated in the Supporting Children's Learning Practice and completed two assessments four times during the practice. Analysis of variance showed a significant improvement in the SEC. Future challenges and initiatives are reported.

Keywords: Social and emotional learning (SEL), Higher education, Training course for teachers and childcare workers, Child responsiveness, Social and emotional competence (SEC), SEL-based teaching.

本論文は、教員・保育士を養成する高等教育におけるソーシャル・エモーショナル・ラーニング (SEL) の授業実践を報告する。SEL は、非認知能力の社会性と感情に特化した教育である。社会性と感情のスキル (SEC) は、学業成績、心理的ウェルビーイング、前向きな社会的交流に関係するスキルである。しかし、日本においては、SEL は主に初等・中等教育で実践されており、高等教育における SEL 実践と研究は今後の課題といえる。

保育・教育の現場で子ども対応力をつけること、ウェルビーイングにつながる SEC を向上させること、を目的に 30 回の SEL 授業を実施した。1～4 年生の受講者 (34 名) は前後期各 2 回、2 つのアセスメントに回答した。分散分析により、子ども対応力と SEC に有意な向上が見られた。今後の課題と取り組みを報告する。

キーワード： ソーシャル・エモーショナル・ラーニング（SEL），高等教育，教員・保育士志望学生，子ども対応力，社会的感情の力（SEC），SEL 授業科目。

大学における SEL 授業の報告

はじめに

ソーシャル・エモーショナル・ラーニング（SEL）

ソーシャル・エモーショナル・ラーニング（SEL）は、非認知能力の社会性と感情に特化した教育である（川上ら, 2024）。社会性と感情のスキルは、学業成績、心理的ウェルビーイング、前向きな社会的交流に関係する重要なスキルである（OECD, 2021）。SEL を推進するアメリカの団体 CASEL (2025) は、「自己への気づき」「自己マネジメント」「他者への気づき」「対人関係」「責任ある意志決定」という 5 つの枠組みにおいて、SEL が育てる力を説明している。日本における SEL もこの枠組みに基づき実施され、欧米の SEL と同じくらいに効果的であると報告されている（Takizawa et al., 2023）が、普及に関わる課題がある。教育カリキュラムとの適合性が整理されていない、プログラムを実施する時間がないなどの課題が解決される必要がある。

高等教育における SEL

日本の SEL は、初等・中等教育において、欧米、及び、日本で開発されたプログラムの実践と効果が報告されている（Takizawa et al., 2023）。アメリカにおいても、主に K-12 と呼ばれる初等・中等教育で行われ、高等教育に CASEL の枠組みを基にした SEL の実践と研究は進んでいない（川上ら, 2024）。高等教育における SEL に関連すると考えられる 113 の研究のメタ分析では、認知行動的介入、メデ

ィテーション、マインドフルネス、リラクゼーション、ソーシャルトレーニングの 5 つの実践が効果的であると報告している（Conley, 2017）が、SEL の 5 つの枠組みに基づく SEL 教育ではない。高等教育における SEL 実践は、初・中等教育と連携した体系的な枠組みの中で取り組むべきである。

「学びに向かう力」を育てる SEL 教育

新学習指導要領(2020)に「学びに向かう力」として非認知能力の育成が記載された。育成すべき資質・能力として、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」に加えて、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱が示されている。「学びに向かう力」は、「主体的に学習に取り組む力」と「思いやりや感性」として捉えられ、さらに、前者の「態度」は感情や意志が現れた態度である（杉山ら, 2019）。つまり、「学びに向かう力」は、これからの社会を生きるための非認知能力であり、それを育てる教育が SEL であると捉えられる。

初・中等教育における SEL 教育の実践には、SEL を理解し指導できる力が、教員・保育士に求められる。そして、教員・保育士養成課程には、それらの力の育成が求められる。例えば、スイスでは、SEL は教員養成課程のカリキュラムに必修科目として位置付けられ、教員志望学生に SEL の知識と指導力を身につける授業の履修が求められている（Antognazza, 2025）。日本においても、教員・保育士志望の学生が SEL を学ぶことが望ましい。履修過程で、社会的情動の力（SEC）を身につければ、現場で活躍する強みとなり、それぞれの心理的ウェルビーイングが向上し、

離職や休職の予防となるのではないだろうか。

しかし、実践のために解決すべき課題があるだろう。その中で、次の 3 点は重要であるとする。まず、SEL が効果的であるための SAFE というガイドライン(Durlak, 1997)は、高等教育の SEL にも基本となるだろう。SAFE の基準とは、次の 4 点である。S (sequenced)では、段階的にスキルを発達させる順序だった構成、A (active)は活発な活動、つまり、座学ではなくロールプレイや話し合いなどを取り入れた能動的な学び、F (focused)は、社会性と感情の学習に集中した時間が取られていること、E (explicit)は、明確な学習目的、つまり、社会性と感情のどのスキルを学ぶのが明確になっていること、の 4 つが保障されなければならない。次に、エビデンスの検証である。SEL プログラムの多くはエビデンスを確立しながら発展している。適切なアセスメントを用いて教育効果を測りながら展開する必要がある。最後に、日本の社会文化への適用を考慮する必要がある。日本の社会や教育制度の中で実践できる教育目的や内容が求められる。

大学生の SEC と SEL 指導力を向上させる授業

2024 年度「子どもの学び支援実践」科目に「SEL による人間力の育成」として、週 2 コマ (4・5 限) の授業が実施された。本取り組みは、教員、保育士志望学生の子ども対応力を高めるとともに、教育・保育に活用する SEL 理解・指導力を養い、心理的ウェルビーイングにつながる SEC を高めるというねらいを持つ授業である。大学生の「子どもに対応する力」と「社会性と感情の力」を目標変数として測定した。

方法

参加者

西日本の私立大学児童学科に在籍する 1～

4 年生の「子どもの学び支援実習」受講希望者 34 名が、通年 30 回の授業に参加した (1 年生 22 名、2 年生 3 名、3 年生 7 名、4 年生 2 名)。大学院生 1 名は、教員指導補助と学生活動補助を行うためティーチングアシスタントとして参加した。教員は、主となる SEL 実践と研究に関わる教員二名の他、学科全教員が 30 回の授業の幾つかを担当した。

前期 15 回の活動計画

前期 15 回は、CASEL (2025) の 5 つの枠組みである自己理解、自己管理、他者理解、対人関係、責任ある意志決定の各能力を育てる目的と活動で構成された。例えば、第 1 回目の前半 (4 限目) では、受講生は、第 1 回目のアンケートに答えたあと、SEL とはどんな学びかを理解するための講義を受けた。活動としては、「自己紹介をしよう」「挨拶をしよう」など互いを知るゲームに取り組んだ。後半 (5 限目) には、学生が運営する新入生歓迎球技大会のプログラム作りと役割分担、市が主催するこどもまつりへの協力体制などが話し合われた。授業構成として、前半は 5 つの枠組みにそった社会性と感情の力の育成、後半はそれらを応用する活動になっている。第 15 回目には、2 回目のアンケートに答え、前期の振り返りを行った。

グループ活動を活発に行うために、1 年生と上級生とで構成されるグループが毎回自動的に作られた。リーダーや記録、発表などの役割を交互に担うというグループ活動が行われた。

後期 15 回の活動計画

第 1 回目には、3 回目のアンケートに答え、後期の活動目標と内容について、話し合った。学科として後期に取り組む行事や活動が多くあり、それらの活動に積極的に取り組むためにも SEL の枠組みが尊重された。例えば、大

Table 1

前期の活動計画

回	内容
1	オリエンテーション 人間力・SEL アンケート
2	SEL スキル 挨拶・自己紹介 球技大会計画
3	新入生歓迎球技大会
4	SEL スキル 児童学科 CM 動画作り
5	SEL スキル 感情サーチ
6	SEL スキル AI 対人間
7	SEL スキル 自己表現
8	SEL スキル 曼荼羅チャート
9	SEL スキル 魅力の交換
10	SEL スキル 七夕集会
11	SEL スキル おあしすゲーム
12	SEL スキル 人をもっと好きになるスゴ技
13	SEL スキル こんなときどうする
14	SEL スキル イラストを描こう
15	SEL スキル 振り返り アンケート

学祭、保育研究大会、ニューイヤーコンサートなどに参加するための話し合いがまず行われ、練習し、実践につなげた。その分野の教員が練習と実践を指導した。

特に、保育研究大会は、他大学の学生との交流の場であり、社会性と情動の力を発揮する機会であると捉えた。ミュージカル「スイミー」は、教員の指導のもと熱心に取り組む様子が見られた。

アセスメント

前期の1・15回目、後期の1・15回目、合計4回、「子どもの学び支援演習アンケート」に回答が求められた。表紙には、自己評価であること、学びの成果を知るために行うこと、正しい答えや間違った答えはないこと、個人が特定されないことが教示され、学科の資料になることについて、同意します・しませんの回答を求めた。学年と氏名の記入を求めたが、4回の回答を対応させるために必要であることを説明し、氏名はイニシャルなど記号でもよいと伝えられた。

Table 2

後期の活動計画

回	内容
1	オリエンテーション 後期の計画 アンケート
2	球技大会
3	ミュージカルを計画しよう
4	大学祭の準備をしよう
5	ハロウィーンを計画しよう
6	ミュージカルの練習をしよう
7	ミュージカルの練習をしよう
8	ミュージカルの練習をしよう
9	ミュージカルのリハーサル
10	クリスマス会を計画しよう
11	救命救急法講習会に参加しよう
12	ミュージカルのリハーサル
13	ミュージカルのリハーサル
14	振り返り アンケート 球技大会計画
15	4年生送別球技大会

アセスメントは、「子どもに対応する力」を測る尺度、「社会性と感情の力」を測る尺度、授業に対する意見や感想を聞く自由記述の3種類である。受講生は、教員志望と保育士志望の学生がほとんどであり、「子どもに対応する力」はSECに関係すると考えられる。よって、「社会性と感情の力」とともに「人間力」として捉え、子どもに対応する力を測った。

「人間力」とは、「学びに向かう力」の概念の中で説明されているので、学生の理解が得やすいと思われる。

「子どもに関わる力」尺度(12項目5件法)は「対子ども効力感尺度」(桂田ら, 2020)を用いた。大学生が子どもと関わるボランティア活動などを自己評価するための尺度として開発され、高い信頼性が確認されている。

学生のSECを測る「社会性と感情の力」尺度(17項目4件法)は、アメリカで開発された尺度SECA(Social and Emotional Competency Assessment)を翻訳した。SECAは、CASELの5つの枠組みにそって子どものSECを測ることができ、アメリカで広く使用されている

(<https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S019339731630137X>)。

結果

アンケート 4 回の平均値と標準偏差値 (N=34) を Table5 に示す。4 回のデータ入力と分析は大学院生が担当した。本研究における 2 つの尺度の信頼性を Cronbach α で確認した。「子どもに対応する力」尺度は.926, 「社会性と感情の力」尺度は.873 であり, 十分に信

頼できる結果である。また, 2 つの尺度の Pearson の相関係数は.726($p<.001$)であり, 有意な相関が確認された。

「子どもに対応する力」は, 3 回目に有意な向上が見られた: $F(2,29)=6.62, p=.04$ 。「社会性と感情の力」は, 4 回目に有意な向上が見られた: $F(2,26)=4.55, p=.02$ 。

自由記述では, 1 回目の記入者は 34 人中 22 人である。学年を超えた活動を楽しみたい (例: たくさんの人, 違う学年の方と関わることがとても楽しみ), 子どもと上手に接す

Table 3

アセスメント「子どもに対応する力」

2. 下の文の内容があなたにどのくらいあてはまるかを考えて、1:あてはまらない、2:あまりあてはまらない、3:少しあてはまる、4:あてはまる、のどれかに○をして答えてください。←				
← 今の自分の社会・感情の力・スキルを考えて答えてください←				
	あては まら ない ←	あ ま り あ て は ま ら ない ←	少 し あ て は ま る ←	あ て は ま る ←
1 自分の強みを知っている←	1	2←	3←	4←
2 いろいろな気持ちのせいで集中できなくなるときがわかる←	1	2←	3←	4←
3 自分がどんな気持ちになっているかわかる←	1	2←	3←	4←
4 自分を落ち着かせる方法を知っている←	1	2←	3←	4←
5 自分と違う考えを聞いて「なるほど」と思う←	1	2←	3←	4←
6 その人が何を感じているか、その人の表情を見るとわかる←	1	2←	3←	4←
7 助けて欲しい人に気づける←	1	2←	3←	4←
8 もしイライラしても、やっていることを最後まで終わらせられ	1	2←	3←	4←
9 とても興奮しているときでも、落ち着いていられる←	1	2←	3←	4←
10 難しいことでも最後まで終わらせられる←	1	2←	3←	4←
11 自分の目標を立てることができる←	1	2←	3←	4←
12 気分が乗らないときでも、学校の勉強に取り組める←	1	2←	3←	4←
13 テストのために準備することができる←	1	2←	3←	4←
14 自分の意見と違っていても、クラスメイトの意見を大事にでき	1	2←	3←	4←
15← クラスメイトと仲良くできる←	1	2←	3←	4←
16← 何かを決める前に、先のことを考えられる←	1	2←	3←	4←
17← 何が正しくて何が間違っているかを知っている←	1	2←	3←	4←

る力や教育力、保育力を高めたい（例：これからたくさんの方に積極的に挑戦して理想の教師像に近づけるように頑張りたい）、自己理解・自己管理・自信など非認知能力を伸ばしたい（例：いろいろと不安なことがたくさんあるが、この授業・講義で自信がつくようにしたい）、などが書かれていた。

4 回目の自由記述記入者は、34 名中 29 人であり、自己の成長への気づきが多く書かれていた。以下にその幾つかを紹介する。

・スイミーの劇をすることで、みんなで団結して 1 つのものをつくる楽しさや達成感を得ることができました。来年度は、よりみんなと協力していろいろなことを成し遂げたいと考えています。また、子どもと関わることでできるボランティアにもっと参加したいと思います！！

・この授業の活動を通して、同級生だけでなく先輩方とも関わることでできるとても楽しかった。また、自分の良さを見つけたり苦手なことを見つけたりなど、自分について考える習慣ができました。来年度は、1 年生の時に始めたことを継続しつつ、子どもと関わるボランティア等の活動を見つけて積極的に参加したいです。

・この実習を通して、先輩方との関わりも同級生との関わりも増えて、仲良くなるのにあまり時間がかからなかったです。他県から来た身としてはとても安心できました。活動や遊びを通してたくさん話せたので、これからも続けてほしいです。

・同級生だけでなく、4 年生とも仲良くなり、大学生活がより楽しく思い出深いものになったと思います。自分の苦手な

Table 4

アセスメント「社会性と感情の力」

1. 1～5のうち、一番あてはまるもの1つに○をしてください正解や不正解はありません。						
今の自分の子どもに関わる力・スキルを考えて答えてください。	全くあてはまる	少しあてはまる	あてはまる	だいたいあてはまる	とてもあてはまる	
1 子どもを上手にほめることができる	1	2	3	4	5	
2 子どもを上手に注意することができる	1	2	3	4	5	
3 子どもの気持ちをくみ取ることができる	1	2	3	4	5	
4 子どもを学習や活動に向かわせることができる	1	2	3	4	5	
5 子どもと楽しく話すことができる	1	2	3	4	5	
6 子どもが心をひらいてくれるように関われる	1	2	3	4	5	
7 子どもの望ましくない行動をコントロールできる	1	2	3	4	5	
8 子どもに教えるコツがわかる	1	2	3	4	5	
9 子どもと楽しく遊べる	1	2	3	4	5	
10 子どもとの対応に困ったときに誰かに相談できる	1	2	3	4	5	
11 子どもとの対応に困ったときに自分で調べ考える	1	2	3	4	5	
12 困ったことを目上の人に相談できる	1	2	3	4	5	

Table 5
アセスメント 4 回の変化

SEC	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
CS 平均	42.15	44.42	44.66**	45.69
標準偏差	9.84	10.31	8.96	12.48
SE 平均	52.62	54.24	54.47	54.45**
標準偏差	7.58	8.76	7.47	7.38

注) SEC: 社会性と情動 (感情) の力 CS: 子ども対応
SE: 社会性と感情 ** $p < .01$

ことに挑戦するだけでなく、自分の得意をさらに伸ばすことができたと感じます。ミュージカルでは、みんなと協力して1つのものをつくり出す楽しさを味わうことができました。

・4年生として、自分なりにしっかり頑張っていくことができてよかったと感じています。1年生, 2年生, 3年生の皆さん, 最後まで本当にありがとうございました。

考察

本取り組みの結果を、前述した課題から考察したい。①SELが効果的であるためのSAFEというガイドライン(Durlak, 1997), ②効果の確認, ③社会文化的妥当性の3点である。

①SAFEというガイドライン

S 順序だった構成(sequenced), A 活発な活動 (active), F 集中した取り組み (focused), E 明確な学習目的 (explicit)の4点が保障されていたろうか。

本取り組みは、「子どもに対応する力」と「社会性と感情の力」の向上を目標として実施され、毎回グループ討議や活動があり、また、パフォーマンスや造形活動なる多様な活動形態に取り組んだ。また、第1回目の自由記述から、これらの目的を参加学生は理解していたことが伺われる。A と E については、確認

することができる。

しかし、30回の順序は、カリキュラムや行事との兼ね合いが優先された状況があり、CASELの5枠を順序だてて行なうこと、集中した取り組みとして行うことに難しさがあった。さらに、どういう順序が効果的なのか、どのくらい集中して取り組むか、を模索する段階でもあった。S と F については、今後の課題である。

②効果を確認する

2つの尺度を使って4回にわたる変化を調べることができた。1回目に比べ、「子どもに対応する力」は3回目に、「社会性と感情のちから」は4回目に有意な向上が確認できた。

第1回目の2つの尺度の平均値(子どもに対応する力 42.25/60; 社会性と感情の力 52.62/68)から、学生たちはある程度これらの力を持っていたと考えられる。それゆえに、4回を通してそれぞれの力が向上したという今回のような分析結果だけでなく、各項目に注目した分析により、ターゲットとする強みとなる力・スキルを特定し、それらの向上を導く取り組みとアセスメント分析が求められる。

③社会文化的妥当性

学科のカリキュラムや行事があり、それらの目標やスケジュールに適応する、指導に当たる教員の担当が可能であることなどが優先した部分もあった。ターゲットとなる力の育成を実現する活動構成が、社会文化的に妥当であるかの検証は簡単ではない。しかし、学生の自由記述からは、多くの学びが明らかである。社会文化的妥当性を測る方法を今後の課題としたい。学生の自由記述にあるように、継続していく価値がある取り組みである。

おわりに

本取り組みは、科目「子どもの学び支援実習」を SEL ベースの教育として捉え、学科の 1～4 年生が受講する前期後期 30 回の授業であった。高等教育における SEL 実践は少なく、また、通年の授業として位置づけられた SEL 教育は他に例を見出せないなかで行われた。本年度の成果と課題を今後の取り組みに反映させ、効果的な高等教育における SEL 教育を実践していきたい。

利益相反

利益相反なし。

引用文献

- Antognazza, D. (2025). SEL in Switzerland [Oral Presentation] . SEL Meeting. Tokushima Bunri University, Tokushima.
- Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning: CASEL). Retrieved February 24, 2025 from <https://casel.org/fundamentals-of-sel/what-is-the-casel-framework/>
- Conley, C. S. (2017). SEL in Higher Education. (J. A. Durlak, C. E. Domitrovich, R. P. Weissberg, & T. P. Gullotta Eds.) Handbook of Social and Emotional Learning: Research and Practice. The Guilford Press. New York.
- Durlak, J. A. (1997). Successful prevention programs for children and adolescents. New York: Plenum.
- 桂田恵美子・赤澤淳子・谷向みつえ (2020) . 対子ども効力感尺度の作成. 関西学院大学心理科学研究, 46, 31-35.

川上ちひろ・今福倫太郎・早川佳穂・堀田亮・高橋美裕希・鷹羽律紀・藤崎和彦・西城卓也 (2024) . 特集 医療系学生に必要な非認知能力 各論 1. 社会性と情動の学習 (SEL) とは何か. 医学教育 55(4), 301-308.

文部科学省 (2020) . 新学習指導要領
Retrieved February 24, 2025 from <https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201903/2.html>

OECD (2021) . Beyond Academic Learning: First results from the Survey of Social and Emotional Skills. OECD Publishing, Paris. Retrieved February 24, 2025 from https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/publications/reports/2021/09/beyond-academic-learning_46cf4e15/92a11084-en.pdf

杉山尚美・可能誠司(2019). 新しい教育課程で目指す「学びに向かう力, 人間性等」についての研究. 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 4, 1-8.

Takizawa, Y., Bambling, M., Matsumoto, Y., Ishimoto, T., & Sisira, E., (2023) . Effectiveness of universal school-based social-emotional learning programs in promoting social-emotional skills, attitudes towards self and others, positive social behaviors, and improving emotional and conduct problems among Japanese children: a meta-analytic review. Frontiers in Education 8. DOI: 10.3389/feduc.2023.1228269